

琉球大学学術リポジトリ

ICT遠隔交流を通じた国際理解

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2009-08-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 與儀, 峰奈子, Yogi, Minako メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/11647

ICT 遠隔交流を通じた国際理解

與儀峰奈子*

ITC Teleconference and Global Mind

Minako YOGI

本研究は小渕フェローシップの支援によって実施された遠隔教育の実践結果に基づき、遠隔通信技術がもたらす小学校英語教育の可能性について考察することを目的とする。

2005年1月28日、琉球大学、米国東西センター、ハワイ大学を結び「テレカンファランス2005－クロスロード・イノベーションに向けて－」と題する遠隔通信会議が実施された。その成功を受け、同年2月19日、琉球大学附属小学校が主催する千原初等教育研究大会の分科会において、この遠隔通信システムの小学校英語教育への導入の可能性を提案し、5月26日実際に琉球大学附属小学校とハワイプナホウ小学校の児童による遠隔交流会を実施した。更に7月22日には、千原初等研究大会において附属小学校とハワイ東西センターを結ぶ遠隔通信を行った。

この遠隔地でのやり取りを可能にしているIP通信技術は、“e-Japan”から“u-Japan”へと矢継ぎ早に策定される国家規模の戦略の下、より安価で高速なものへと急成長を続けている。この技術の進歩は刮目に値するもので、特に通信の体感速度には驚嘆させられる。音声に時間的ズレはほとんどなく、映像もスムーズで一頃のテレビ電話が想起させるコマ送り映像の面影はない。

このような技術革新に伴ってITもICT(Information Communication Technology)とその名称を変化させている。この付記された“C(コミュニケーション)”は、情報収集等に重きが置かれていた従来の受動型の情報化社会から自己

参与型への移行を示しており、今回の遠隔交流の実践もその潮流の中にある。

海外とのリアルタイムの交流は英語教育にとって測り知れないメリットを生む。教室での学習が時空間を超えた生の体験の中で実践されていくのである。本研究では、国際理解教育にも関連付けて議論したい。

1. はじめに

ICTを含むデジタル技術が、国際交流および英語教育にもたらした恩恵は計り知れない。すでにカセットテープで録音、再生をおこなっている現場は少なくなっているであろうし、CDでさえソリッド・メモリーを利用したメディアに取って代わられつつある。当然のことながら、映像もそれに追従している。つまり、より安価かつ手軽にヴァーチャルな言語空間が体験できるようになったということである。

このように急速に身近になったデジタル技術が、テレビ会議、オンライン通信、Eメール、ビデオレター等を通じて、多様で効果的な国際交流の場を提供している。しかし、「グローバル化」という時代を背景とした場合、テレビ会議が持つ意味は特に大きい。本論においてはテレビ会議を遠隔交流と位置づける。当然のことながら、遠隔交流は子どもたちにとって会議ではなく、未知の体験へと開かれた学びの空間であるからだ。計4回実施された遠隔交流を基に、そのアンケート結果の

* 英語教育専修

分析を交えながら、国際交流および英語教育における遠隔交流のもつ特異性、重要性を明らかにしたい。

2. ICT 遠隔交流と ICT 教育

教育における国際交流の最終的な目的はコミュニケーション能力の育成であり、その目標の下、それぞれの現場における取り組みが展開されている〔前田 2003:88〕。国際交流は直接的なもの、間接的なものに分けられ、前者の例としては、国内における外国人との個人、組織、地域単位での交流、又、海外を訪問しての現地における個人、組織、地域単位の交流等が上げられる。一方、後者は個人レベルから組織レベルまでの広がりのあるデジタル技術を活用したものであるといえる。

ICT 遠隔交流と名づけているのは、技術的には ICT 教育より限定されたものでありながら、理想的にはより積極的な人間同士のコミュニケーション空間の創出を意味するからである。その理念を明確にするためにも、まず ICT 教育とは何かを見ておかなければならない。

ICT 教育とは、情報社会に向き合う姿勢を育成する情報教育と異なり、コンピュータを中心とするマルチメディアを活用する実践的技術を育成するものである。それはこれまで、例えばカメラに関しては撮影技術、音楽関連であれば録音技術というように、メディアによって個別にその技能の育成が図られてきたものが、今や情報やメディアのデジタル化に伴い、相互のネットワーク化が行われ、統一的な視野の下での育成が可能になったのである（久保田 2004:2-3）。

このように多様なメディアをデジタル技術によって縦横無尽に横断してゆく ICT 教育の視点から見れば、遠隔交流に活用される技術は非常に限定されたものである。年々アップグレードされながら安価になっているテレビ会議システムが一つあれば可能となる。もちろんデジタル化されているがゆえに、そこに、画像、音声、外部ソフトによるプレゼンテーションなどを導入することは容易であるが、遠隔交流にとってそれらは周辺のものに過ぎず、最も重要なのは、交流する人の姿と音声は双方に届けられることである。それはまさ

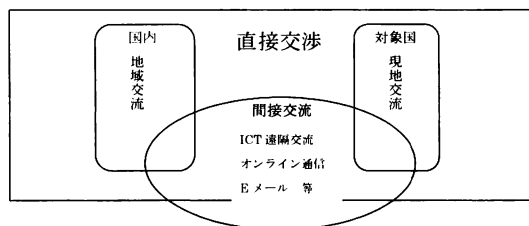
に ICT 技術によって容易に可能になったといえる。

ICT 教育における多くの作業がコンピュータを前にして行われるのに対し、遠隔交流におけるメディアは単なる窓口過ぎない。映画などで多用され、すでに本物を越えてしまっている部分も多いコンピュータ・グラフィック技術は、コンピュータの中に世界のすべてを飲み込んでしまおうとしている。そして、その世界と向きあっているのは個に過ぎない。マルチ・オンラインシステムが同時に複数の人間との通信を可能にするとしても、それぞれのコンピュータの前に座っているのは結局のところ個でしかない。そこでいくら壮大な物語やプロジェクトが繰り広げられようとも、それが演じられているのはコンピュータを中心とした閉塞的な空間でしかない。

もちろん、Levy (2007:109) が指摘するような、iPod などのパーソナル機器によって創出される個人のメディア空間への一体化が起きることは確かであるが、遠隔交流では対話者がモニタとキーボードの束縛から解かれることで、より広い空間が提供され、何人も人間がその空間の創造に参画できる。それゆえ、単に相手側に情報を提供するという意味での積極性ではなく、今そこに体験されつつある空間を共同で創造しているという意味において、遠隔交流ではより積極的なコミュニケーション空間が創出できる。

3. 国際交流と ICT 遠隔交流

先述したように、国際交流は直接的なものと、間接的なものとに分けられ以下のようにまとめられるであろう。



同じ空間を共有することで、目に見えない情報が増すような印象のある、直接交流の方が、間接交流より効果が高いと一見思えるかもしれない。

更に地域交流と現地交流では、空間が与える情報の濃度が濃くなるので、目標言語の土地に直接出向いた方が高い効果が得られることも確かであろう。

この「空間の共有」という意味においては、ICT遠隔交流はケーブルというメディアによって空間が分断されているので、直接交流と比べて分が悪いといえるかもしれない。しかし、逆にこの分断こそが、グローバル社会の交流にとって重要な役割を果たす。なぜなら、分断されているが、それは「相異なる空間」を共有していることにもなるからである。つまり、同じ地球にいながら、異なる状況で、全く異なる時間を生きているという体験を同時に共有できるのだ。これこそがグローバル化時代に求められる感性ではなからうか。

このような異なる空間を共有する遠隔交流を実施するためには、時間のマネジメントは重要な問題になってくる。例えば前田（2003:93-94）の実践報告にある通り、遠隔交流を授業プログラムに取り入れていく場合、まず相手地域との「学期のずれ」が問題となる。前田の例の場合、相手地域がオーストラリアということで、あまり意識されていないが、一般的には時差の問題は大きな課題といえる。もちろんプログラムの運営という点において、この時差は乗り越えなければならない大きな障壁となるが、異なる空間を共有すると言う意味で、この問題は逆に大きな強みともなる。生徒たちは同じ空間にいながら、全く異なる生活時間を体験することになるからである。この点に関しては下記の具体的な実践分析の中で詳しく述べることにする。

このように、経験される情報量においては直接交流に比べてやや見劣りする遠隔交流ではあるが、まさに離れている場所を繋ぐからこそ達成できる、異なる空間の共時的体験という利点を持っており、この点においてグローバル化社会に生きる人材育成のためには、より重要な役割を果たすと考えられる。

4. ICT 遠隔交流とトランスナショナルリティ

共時的に異なる空間を体験できるという遠隔交流の特質は、異文化理解の在り方そのものの変革

の延長線上にある。それは「インターナショナル」から「トランスナショナル」への流れである。佐藤（2002）は両者の違いについて以下のように述べている。

国際化という概念は多義的だが、大きく分けると「インターナショナル」と「トランスナショナル」という2つの側面がある。前者は国民国家を前提に世界的な相互依存関係の強まりを、後者は民間や個人をベースに展開する交流や人の移動を示す概念だが、いずれもグローバル化、ボーダレス化を伴う。国際化はこの2つが相乗して進行している。日本ではとりわけ「トランスナショナル」な動きが強まっており、否応なく異文化との共生が迫られるようになってきた。教育も例外ではなく、こうした「トランスナショナル」な動きに対応し、異なった文化を持つ人との共生が大きな課題となる。中央教育審議会の第1次答申でも、異なった文化を持つ人と共に生きていくこと、すなわち共生が重要な課題とされている。

佐藤（2002:2）

グローバル化、ボーダレス化する世界の流れの中で、もはや国民国家単位のやり取りはあまり大きな意味を持たなくなってきた。もちろん個人の人種的、文化的アイデンティティ、あるいは経済活動の概念的「単位」として機能するものとして、国民国家はその重要性を持ち続けるであろうが、それはあくまでも内向きな求心性や、その求心性が描き出す、他の共同体との境界線を維持する場合であり、ボーダレスという言葉が示すように境界線などもとせず、外側へ、内側へと交流が展開する場合には逆に国家意識は重荷になりかねない。

現代のボーダレス化社会において、その交流の単位はあくまで民間、個人なのである。この交流を支えているものは、「交流の欲求」であり、国家間の儀礼や政策のニーズ等の外側からの形は必要としていないのだ。トランスナショナルな交流が求めるものは、表層的な儀礼ではなく本質的な交流である。この意味において、ICT 遠隔交流が直接的な交流よりも重要な役割を果たすことは明らかであろう。

情報、技術の格差の問題は重要であるが、少な

くともインターネットの恩恵にあずかることができる地域において、もはや情報のボーダーはない。そして繋がれているのは国家ではなく、個人と個人に及んでいる。国家が繋がれていない場合でさえ個人同士がコネクトされていることもある。もちろんそのような情報のボーダレス化に大きな危険が潜んでいることも事実である。しかし、それは別の側面からアプローチすべき問題として、ここではその積極的な部分に目を向けたい。空間的な隔たりを軽々と乗り越えてスクリーン上で対面する個人と個人はもはや国家など背負っていない。

直接交流においては、それが外国人を招いての地域交流又は現地交流であっても、自分が所属する国を背負う意識は強くなるを得ない。なぜなら、自分も相手も遥か遠くの国から空間的な「ボーダー」を越えて来たからである。そうした境界線に対する意識を、ICT 技術は効果的に融解させてくれる。

もちろんこれは、国家意識を持つ必要がないと言っているわけではなく、国家意識とは別の存在の在り方、つまり日本人であり地球人でもあるという意識の涵養を ICT 技術は可能にしているのだ。国家意識と世界意識は相互依存的なもので、異文化に対して開かれた社会を創出することは同時に自文化や母語に対する意識を促進させるのである(中村 2007:5)。

国家意識に対する基盤を築いてから異文化理解に乗り出すのが「インターナショナル」な姿勢だとすると、異文化理解の中で自国に対する意識が涵養されていくのが「トランスナショナル」な姿勢といえる。しかし、後者の場合それはあくまで結果論であり、目指すところは表層的な儀礼の持つ抵抗感を取り除くことによる風通しのよさであり、身軽さであろう。その意味で、ICT 遠隔交流は、明らかに「インターナショナル」から「トランスナショナル」への流れの延長線上にある。いかにその変革がなされているのかという、根本要因を探れば必ずネットワーク技術の革新が至る所で顔を出してくることは明らかである。ネットワーク通信のような個人のレベルも含めると、ICT遠隔交流は、「トランスナショナル」な流れへのきっかけ、原動力、そして、その未来でもあるといえる。

5. ICT 遠隔交流の具体的運営

ICT 遠隔交流の具体的運用としては、やはり教育カリキュラムにおける恒常的活用という形になるのがベストと考える。また、少なからず「インターナショナル」な精神性が育成されつつある中学、高校よりも、感覚がまだ柔軟な小学生の方が効果が高いと思われる。もちろん、できるだけ複数の文化地域との交流が望ましいが、やはりこれまでの実績の積み上げと現実性を考慮すると英語圏との交流がまず優先されるであろう。

実際のカリキュラム編成という観点から考えると、もはや新規に ICT 遠隔交流を導入する枠を作り出すことは難しいので、英語活動の中に組み入れられるかその連携が現実的であろう。

もちろん英語教育といっても、現在の小学校教育における位置づけが示すように、国際理解、そしてグローバル化世界に生きる人間性の涵養の端緒に過ぎない。「トランスナショナル」な意味合いが重要性を持つ ICT 遠隔交流が、いかにして具体的な国際感覚の育成に貢献できるのか、国際理解教育の枠組みを確認しながら検証したい。

国際化教育を進める上で、1996年7月の中央教育審議会答申において、以下の3点をその留意点として挙げている。

- 1) 広い視野を持ち、異文化を理解すると共に、これを尊重する態度や異なる文化をもった人々と共に生きていく資質や能力の育成を図ること。
- 2) 国際理解のためにも、日本人として、また個人としての自己の確立を図ること。
- 3) 国際社会において、相手の立場を尊重しつつ、自分の考えや意思を表現できる基礎的な力を育成する観点から、外国語能力の基礎や表現力等のコミュニケーション能力の育成を図ること。

第15期 中央教育審議会の答申 (1996年7月)

ここには、国際理解の大枠が示されており、それはいうまでもなく自国文化と異文化とそれを繋ぐ外国語能力である。つまり、自文化と異文化の両者を目の前にして、自己の経験や認識として有機的に受け入れていく具体的な方法といえば、「外

国語能力」なのである。

2001年に文部科学省は、国際理解を深める具体的な学習活動を示しているが、明らかにその中心は「外国語活動」である。

- 1) 「外国語活動」で培ったコミュニケーション能力や外国語への興味・関心を「国際交流活動」での外国人との関わりの中で生かす。
- 2) 「国際交流活動」での体験を生かし、コミュニケーションを図る上で自分の表現したい言葉を見つけ、「外国語活動」に取り入れる。
- 3) 「外国語活動」で触れた異文化への興味・関心の高まりを更に、「調べ学習」の素材へと関連づけることが重要。

文部科学省 (2001:2)

この方針にあるのは、外国語活動を中心とした国際理解の流れであり、始まりは外国語活動にあり、それによって可能となった経験は、また外国語活動に還元され、そして更なる学習の広がりや外国語学習から展開されるのである。

この外国語活動の基音をなしているのは、柔軟性と開放性である。中村 (2007) はグローバル化時代に外国語を学ぶ意義として次のように述べている。

母語及び自文化を大切にしながら、多言語・多文化を学ぶことで人生観や世界観が変わる。外国語を学び、使うことで、自文化や母語に対する理解も一層深まり、多様な人々とのコミュニケーションで高められた思考力や判断力は、より開かれた社会をもたらし、時として国家政策や世界をも変える。(中村 2007:5)

ここには明らかに柔軟性と開放性の両側面が示されているが、一方で中村の主張が、インターナショナルな感覚を保持しているという点で非常に興味深い。やはり外国語を通じて異文化を尊重する限りは、自国の文化および母語をまず大切にしなければならない。異質な文化に対する理解を深めることは、自文化の輪郭を明確にすることでもあり、それはその認識を深めることに繋がるのだ。又、自文化に対する意識の枠組みが異文化とのコミュ

ニケーションによって改変を迫られる点に着目しているという意味において、この主張は「トランスナショナル」を志向しているともいえる。

そして、「トランスナショナル」な志向性もつ、柔軟性、開放性が教育現場において実践されるとき、影浦 (1999b) は育成の焦点として以下のように具体的に述べている。

国際感覚とは、自分の住んでいる地域や自分の国だけの文化の価値観にとらわれないで、国の内外の物事を極めて広い視野から見て思考し、判断し、自分の地域や自分の国を含めて世界において自ら主体的に生きていくことのできる資質である。国際感覚の要素としては「好奇心」「柔軟性」「歴史感覚」「個の確立と尊重」と「表現力」の5つが考えられる。

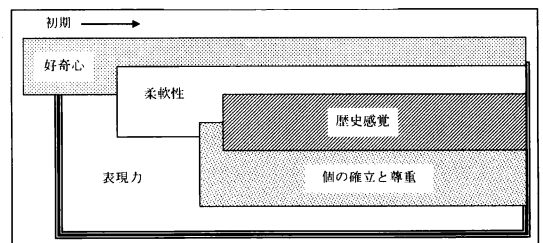
- 1) 好奇心 (curiosity)
- 2) 柔軟性 (flexibility)
- 3) 歴史感覚 (historical awareness)
- 4) 個の確立と尊重 (individuality)
- 5) 表現力 (expressiveness)

(影浦 1999b:14-15)

大別して、これら5つの項目は短期的に達成できるものと、長期的な育成が必要なものに分けられるであろう。「好奇心」、「柔軟性」が前者に相当し、「歴史感覚」、「個の確立と尊重」、「表現力」が後者にあたることは言うまでもない。又、それぞれに育成されるべきタイミングや相互関係も異なる。それを図式化すると以下のような形になると考えられる。

もちろん、好奇心は時系列的には最初におかれるが断続的に喚起されるべきものであり、好奇心によって開かれた柔軟性が、歴史感覚や自己の確

国際感覚の育成

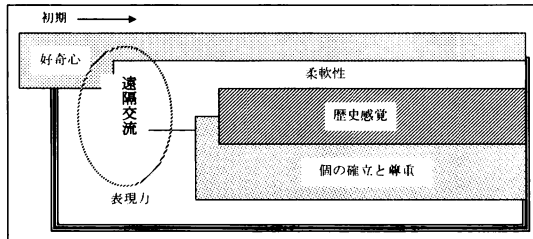


立へと明確な形へ還元されていく循環の繰り返しというのが実体であろう。しかし、それぞれのサイクルが好奇心と柔軟性によって開始されること

は明らかである。

それでは上記の国際感覚育成の循環の中で、ICT 遠隔交流はどこに位置づけられるであろうか。もちろん情報のやり取りとして、すべての側面で活用可能ではあるが、これまで議論してきた異空間の共有、トランスナショナリティ等の特質を念頭に置けば、各サイクルの初期が最も効果的だといえる。

国際感覚の育成における ICT 遠隔交流



この位置づけにおいて気になるのは好奇心と表現力との時間関係であろう。ICT 遠隔交流が好奇心に大きな弾みをつけることは明白である。しかし、少なくとも相手側とやり取りをするための最低限の表現力は求められる。そして、その表現力を身につけるためには更に遡った好奇心の喚起が必要となる。

つまり、ICT 遠隔交流の具体的運営にあたって、学年としては小学生の段階が望ましく、育成される感覚との関係で行けば、学習の初期段階が効果的である。そこに位置づけられることによって、遠隔交流は、動機付けられた表現力の実践の場でありつつ、未知なる異文化に対し意識が開かれ、柔軟性と共に更なる好奇心を刺激する役割を果たすことになる。もちろん準備、設備、時差等の課題があり手軽に実施するというわけにはいかないが、このような位置づけを踏まえ、遠隔交流前の動機付けとなるような調べ学習、自己表現に繋がるような外国語活動の適切な積み上げ、交流実施後の異文化理解の定着、新たな動機の喚起等と連携させ、現行あるいは新たに構築されるカリキュラムに効果的に組み込まれることが求められる。

6. ハワイー沖縄 ICT 遠隔交流

これまで論じてきた国際理解教育における遠隔交流の特質を踏まえた上で、実際に行われた事例を検証したい。冒頭で述べたように、遠隔通信システムを利用した双方向交流は計4回行われた。

- 1) 2005年1月28日:遠隔通信会議「テレカンファレンス2005ークロスロード・イノベーションに向けてー」(琉球大学, EWCハワイ東西センター, ハワイ大PEACESAT)
- 2) 2005年2月19日:千原初等研究大会分科会(琉大附属小, ハワイ大 PEACESAT)
- 3) 2005年5月26日:遠隔交流会(琉大附属小学校, ハワイプナホウ小学校)
- 4) 2005年7月22日:千原初等研究大会(琉大附属小学校, EWCハワイ東西センター)

特に最後の東西センターとの交流においては、ハワイ時間における夜と、日本の昼間という興味深い設定で実施され、児童のグローバルマインド育成に重要な観点を提示するなど、それぞれに異なる意味合いを持つが、同世代間のしかもクラス単位の交流という意味において、本論においては3番目の実践に焦点をあてる。

2005年5月26日に行われた交流会の概要は以下の通りである。

ハワイ州プナホウ小学校&琉大附属小学校遠隔交流会
 日時：5月25日(水)3-4pm(ハワイ)
 5月26日(木)10-11am(沖縄)
 場所：ハワイ大学PEACESAT Telecommunication Research Center
 琉球大学附属小学校コンピュータ室
 生徒：プナホウ小学校(25名)&琉大附属小(34名)
 内容：1)学級紹介&挨拶 2)質疑応答クイズ
 3)文化交流 4)ゲーム活動

上記のように、学級紹介、クイズ質疑応答、文化交流、ゲーム活動等の4種類のプログラムをカバーし、クイズタイムでは独特のアイテムを紹介し、それが何であるかを想像させるような活動を盛り込んだ。例えばハワイからは地域特有の楽器や伝統芸能などで用いるアイテムが紹介され、附属小からは日本ならではの給食当番の服、ランドセル、そろばんなどを見せて想定(guess)させる活動

を行った。文化交流では附属小は校歌と習字を披露し、ブナホウ小学校はフラダンスとハワイアンソングを披露。3名のフラダンサーがリーダーとなりダンスの重要な部分を解説し、それを全員で練習した。ゲーム活動ではじゃんけんゲームと、更に担任の指示に従って体全体を用いる Simon says ゲームを行った。国別の動物の泣き声の紹介なども取り入れ、子供たちはお互いの文化(生活・習慣)の類似点や相違点に気づき刺激をうけている様子であった。インタラクティブな作用が多く、異文化理解を深める効果は絶大であったといえる。

交流活動における具体的な内容の選定は文科省の以下の方針に沿ったものである。

交流活動の具体案

- 1) 文化紹介：日本や地域の伝統を紹介する。逆に外国の伝統や習慣を教えてください。
- 2) 行事体験：七夕、節分、Halloween, Christmas など
- 3) 交流活動：交歓会での直接交流会やビデオレター等での間接交流
- 4) 調べ学習：交流を予定している国について調べたり、あるテーマについて各国の事情を調べる等。生徒間の情報交換、共同学習、プレゼンテーションなど。(文部科学省 2001：44)

更に、実際に交流を行ったのが小学校4年生であったため、外国語教育としての企画にあたっては沖縄県教育庁の「小学校英語科の目標（4年生）」にも準じている。

小学校英語科の目標（4年生）：

- * 日常生活での具体的な場面に応じた様々な英語の表現に触れ、世界には色々な国があることや異なる言語や習慣を持つ人々がいることを認識し、相手を受け入れることができるようになる。
- * 日常生活での具体的な場面に応じた英語を聞いて、話の内容が理解できるようになる。
- * 日常生活での具体的な場面に応じた英語を用いて、相手に質問したり、質問に対する自分の考えを相手の目を見て伝えたりすることができるようになる。(沖縄県教育庁義務教育課 2004)

7. ハワイー沖縄 ICT 遠隔交流アンケート結果

この交流会において、ハワイと沖縄の両サイドで遠隔交流会に参加した4年生59名に対し交流会に関するアンケート調査を行った。以下はその結果である。

遠隔交流会アンケート〔琉球大学附属小学校4年生：34名〕

- 1) ハワイの小学校との遠隔交流会は楽しかったですか？
31 out of 34 students. 34人中31人が「はい」と答えた。 97%
- 2) どのようなことが楽しかったですか？
クイズ、じゃんけん、質問タイム、simon says, hula dance, 色々なことを一緒にしたこと、自分で英語を言うのが楽しかった。ハワイの楽器について分かったこと、習字を紹介したこと。
- 3) 交流会を通して学んだことは何ですか？
フラダンス、ハワイの楽器、簡単な英語が上手に言えた、英語が話せた、はっきり話すこと、ハワイと沖縄の人には共通していることがいくつあるということが分かった、ハワイの学校は沖縄より2時間早く終わるので勉強時間が少ないことが分かった、英語を学んだ、ハワイの文化を学んだ、ハワイには日本と違うことが色々あるんだなあということが分かった、英会話ができたこと、英語で色々な言葉がしゃべれる、ハワイでは履きを履かないでそのまま教室にはいる、ハワイには沖縄と全然違う文化や似ている文化もある、ハワイと沖縄には王様がいたこと。
- 4) 交流会で一番印象に残ったことは何ですか？
クイズ、はじめてニュースみたいにテレビに出られたこと、英語でしゃべったときに通じたこと、質問ができたこと、テレビに映った事、沖縄やハワイの物をクイズにして交流したこと、テレビみたいすぐに映像が送れてすごかった、ハワイの生徒とのやり取りが印象に残った、ハワイに日本人によく似ている人がいること、画面を通して話したかったこと、沖縄の文化をクイズにしたこと、ハワイと交流会をしたこと全部、みんなやさしかったのですぐ仲良くなれたこと、フラダンスを習ったこと、じゃんけん、テレビ電話が楽しかった、教えたことを相手が理解していた。
- 5) 交流会を通してハワイの小学生と直接会ってお話しがしたくなりましたか？
34人中33人が「はい」と答えた。

6) 交流会を通してハワイの文化・習慣・言語に興味を持つようになりましたか？

34名中30人が「はい」。

7) 交流会を通して英語をもっと学んで話せるようになりたいと思いましたか？

34名中30名が「はい」。

8) 普段の英語の授業で習ったことが役に立ちましたか？34名中30名が「はい」。

9) 英語の勉強は将来のために大切だと思いますか？34名中33名「はい」。

10) このグローバルな社会で英語はとても必要な言語だと思いますか？34名中33名が「はい」。

11) 将来はどのような人になりたいですか？
科学者、教師、サッカー選手、看護師、調理師、保育士、その他。

12) 遠隔交流会に使った機器（スクリーンや会議カメラシステム）についてどう思いましたか？

すごいと思った、カメラが小さかった、小さくてコンパクトサイズになっていた、生放送なのでしっかりしようと思いました、このようなものがあって便利だと思いました、テレビでハワイと交流会ができるというのは初めて分かりました、遠くにいるのに、スクリーンに映すとすぐ近くにプナホの小学生がいるように感じた、外国人とお話したのでいいと思いました、こんなにすごいとは思わなかった、すごい技術だ、とても興味を持った、カメラが小さいのにすごい、びっくりした、ハワイとは近くないのに、テレビ電話を通じて近くなりすごかったです、見たことがなかったのですごくいいと思った。

13) 今後、遠隔交流会を通してどのようなことをやってみたいですか？

ハワイに科目がいくつあるか聞いてみたい、英語をもっと覚えてその英語を話したい、同じ特技を持つ人同士集まって練習してハワイに紹介する、日本文化をみせる、ハワイの有名な物や生活について聞きたい、英語を教えてもらって、ハワイの子には日本語を教えてあげたいです、漫画の話、今度は恥ずかしがらずに交流会をしたい、英語をもっと話したい、本人の所に行って英語をしゃべりたいです、日本の遊び、ハワイの遊びを一緒にしてみたい、沖縄の文化を教えたい、飛行機でハワイに行ってみたい、英語や日本語を教え合ったりしたい、次は本当にそこにいてみたい、一緒に一日中過ごしたい、自分の好きなことや好きな所を教えたい、英語を使って色々な遊びをしてみたい、沖縄の踊りを教えたい、国内での交流、テレビやアニメの話をしたい、話し合いをしたい。

遠隔交流会アンケート〔ハワイ Punahou 小学校
4年生：25名〕

Evaluation and comments of the teleconference
(May 25th, 2005)

1) **Did you enjoy participating in the teleconference?** 25人クラス全員「Yes」と答えた。

2) **What did you learn through the teleconference?** Japanese language, Japanese customs, how to write kanji, the students serve their own lunch, they have indoor shoes (different shoes for different occasions), the animal sounds are different among cultures, we have similarities and differences, the Japanese school system/schedule (beginning & ending time), I learned that we have a lot to learn about Japan, the teleconference technology (voice takes a couple of seconds to travel through the wire and before the other party can hear the message, interesting guardians (shisa), Technology can really work well to get to Okinawa.

3) **Did you become interested in Japanese / Okinawan Cultures?** Of course, I'm Okinawan and besides I was always interested in it. Yes, and I basically always have been. Yes, I had always been interested in different cultures, Yes, I am going to Japan this summer and I am really excited. Yes, I did become interested in it. Yes, totally. Yes, I always wanted to try Kanji.

4) **What activity did you enjoy the most during the teleconference?**

Animal sounds, guessing games, simon says game, Q&A, teaching Hula dance, Show & tell, seeing them write kanji, Janken.

5) **What did you learn about the Okinawan students?** They stay in school longer than us, they work hard and we have it easy, they are very funny, they don't do bare feet, they have a guardian, That they are just like us in some ways, they have different school year than us, I learned that our schools are much different than I thought it would be, the kanji is very cool!, they aren't that different than us. It must be hard to write kanji when you are a new student in Japan.

6) **Would you like to participate in another teleconference in the future?** Of course, who wouldn't! Next time, I want to stay longer. Absolutely, Yes, it would be awesome. Yes, because it was fun and exciting. Definitely, yes. Sure! 25 名が「Yes」と答えた。

7) **What kind of activities would you like to try through the screen in the future?** I would like to reach through or have our own microphone so we could talk to each other individually on a mini screen. May be try hide and seek, May be have each student say something about themselves, probably show them our school works and some rules, try to read one of their books in Japanese, try to translate the language ourselves, play a typical game of America and Japan, card game, talk to each other more, teach them Hawaiian words, Talk about things that Okinawa has and Hawaii doesn't have, show them playing video games, ask more questions, read a book with them.

8) **Please give additional comments on the teleconference.** It was awesome and I want to do this over and over again. Thank you for giving us this opportunity. I loved it and I've never done anything like this before. I expected the students to be totally different from us but we are very much alike. I hope to have another teleconference some time soon. I loved the teleconference and I am glad that I got to participate in it this year. The teleconference was amazing and I hope to do more in the future. It was cool and I would like to do it again sometime. I loved the whole thing except we didn't have enough time, I loved it, please do it again! I want to do more learning about their culture. I hope the teleconference will be longer with more games and Q&A. I would really like to do this again. I loved the technology and how you can communicate through the screen and having an opportunity to communicate with foreign people/ students. It was a good experience for me. I am glad I came. It was cool. I want to do this again. The teleconference was really exciting plus I liked the technology.

It was awesome to see the Japanese students through the screen.

8. ハワイー沖縄 ICT 遠隔交流アンケート分析

アンケート結果を ICT 遠隔交流の特質に照らし合わせて分析すると、まず、異空間の共時体験については、生活時間が大きく異なる時間に実施した2005年7月22日のものに比べると明らかにインパクトは小さいが、遠くにいる人々と時間を共有していることに関する新鮮さは強く感じているようである。

インターナショナルな側面と、トランスナショナルな側面に関しては特に興味深い結果が見られる。まずインターナショナルな側面としては、すでに日本文化、あるいは沖縄文化の代表者としての自覚が出ていることが挙げられる。これはハワイ側も同様の結果で、いわゆる外国語、異文化教育に対する懸念を取り除いてくれるものである。また、それは更に異文化を知りたいという欲求と同時に芽生えており、異文化理解と自文化意識の相乗効果が明らかに示されている。

トランスナショナルな側面としては、同じ年齢であるために、特に「共通点」、「相違点」に対する言及が多いという点が興味深い。これは、遠隔交流が国民・国家を背負った抽象レベルの交流ではなく、個と個のもつ身近な生活空間同士の接触のためであろう。それは、漫画やアニメなど身近なトピックの交換に意識が向けられていることにも表れている。このインターナショナルな側面とトランスナショナルな側面との混在は、両者が相補的な関係にあることを示すこととなっている。

また、外国語活動に関する結果も眼を見張るものがある。まず、すでに蓄積として与えられていた自己表現方法としての外国語を実際に使って、自分の発話を通じたことに対する喜びがいかにか大きいか素直に表明されている。そして、その感激した気持ちはそのまま、更なる外国語学習に対する意欲に直結される。又、何を話したいか、何を伝えたいかという根本的欲求にも目を向けさせており、自文化、そして個としての自己への意識にも繋がっていることは明らかである。それは、

言葉としての形は訓練したものの、話すべき内容が抜け落ちてしまっているという、これまでの外国語教育法では達成できなかった部分であり、これも ICT 遠隔交流のもたらす大きな効果といえる。

そして、特筆すべき点は、「これからもぜひ継続して欲しい」という要望が多いということである。それは単に動機付けに役立ったということではなく、明らかに子供達の意識が異文化に開かれ、そしてその扉をもっと開いて行こうという意欲へと転換されていった証である。この意欲が国際感覚育成の循環の原動力となることは間違いない。そして、自己を開いていこうとする開放性は、自文化に対する意識や個の確立とも連動しているので、そこに確立される自文化や自意識は、自明のものとして与えられる閉塞的かつ硬直したのではなく、柔軟で創造的なものになると期待できる。

9. おわりに

ICT 技術の恩恵を受けて可能となった遠隔交流は、グローバル時代にふさわしい開放性と柔軟性を兼ね備えた国際感覚を育成する活動として効果的であることはこれまで見てきたとおりである。しかもそれは、自文化、自己に対する意識を強化することにも繋がっている。問題はこの活動をいかに通常のカリキュラムの中に組み込んでいくかである。生徒達の好奇心を持続させ続けることができる程度の定期的な実施は不可欠である。しかし、技術的には安価で手軽になったとはいえ、一番の問題はネットワークの両側の念入りな調整である。今回はその舞台裏の詳細は避けたいが、この企画の時間調整や内容調整は困難を極めたことだけは言及しておく。コラボレーションの事前事後の調整こそがカリキュラムへの導入時における効果の良し悪しを大きく左右することははっきり押さえておきたい。遠隔交流のコラボレーションを行う際の課題として特に明記すべき点は 1) ビデオ会議システムの通信設定に関わる技術的課題、2) 交流を行う時間帯や時期の検討、3) 目的意識の共有等の準備段階における連携協力体制、4) パートナー校の選定、5) 単発か長期に行うか等である。これらの調整の在り方や課題については

別の論考において検討したい。それにしても、両地域の子供達がモニタを通して顔をあわせたときの喜ぶ姿はすべての労苦を吹き飛ばしてくれる。今回の遠隔交流体験が子ども達にとってグローバル社会という「大海」(吉田 2003:115) に出る前の素地作りとなってくれることを願う。また、この体験が中村 (2007:10-11) が言及しているように、国際対話能力 (global literacy)、自文化や国家を超える視野 (transcultural and transnational perspectives) を育む出発点となれば幸いに思う。

* 本論文は2005年5月28日 LET 外国語教育メディア学会九州・沖縄支部、第36回大会口頭発表の内容を基に加筆修正を加えたものである。

* 謝辞：このようなプログラムを企画・実施するにあたり、多大なご協力を頂きました小淵プログラム (国際交流基金、沖縄県人材育成財団、ハワイ東西センター)、琉球大学附属小学校：仲地千佳先生、山下智郁先生、ハワイ Punahou 小学校：Mr. Kris Schwengel、琉大附属小及び Punahou 小学校生徒の皆さん、琉球大学総合情報処理センター：大川康治氏、ハワイ大学テレコミュニケーションリサーチ機関 PEACESAT:Ms.Christina Higa, Mr. Kekoa Hayashi, ハワイ東西センター沖縄プログラムディレクター:Mr. Bob Nakasone, 小淵フェロー：大角玉樹先生、石川隆士先生に心から感謝申し上げます。

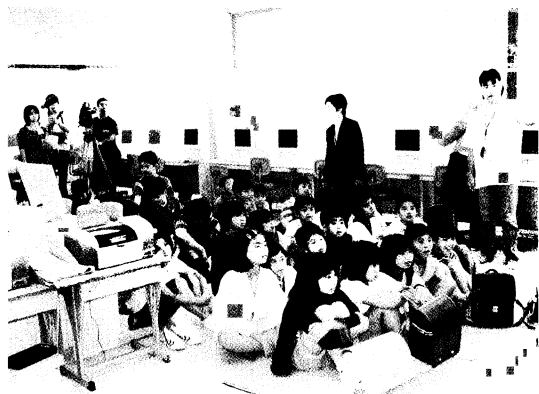
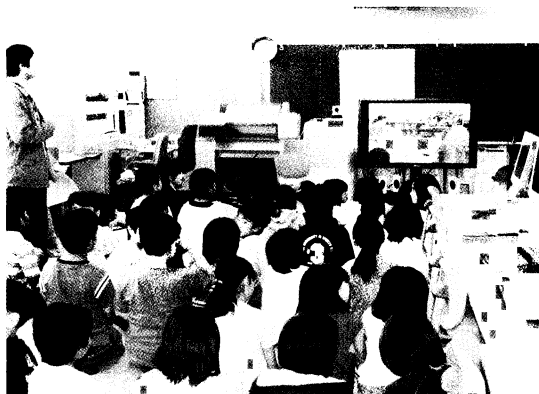
参考文献

- 浅野誠・ディビット・セルビー編『グローバル教育からの提案：生活指導・総合学習の提案』日本評論社
- 浅沼茂編集 (2000) 『教職研修』No.6「総合的な学習指導の手引き」教育開発研究所
- 井上智義 (2002) 『異文化との出会い：国際理解教育の視点から』プレーン出版
- 久保田賢一・黒上春夫編著 (2004) 『ICT 教育の実践と展望：デジタルコミュニケーション時代の新しい教育』(水越敏行監修) 日本文教出版
- 岡本敏雄・伊東幸宏・家本修・坂元昂 編『ICT 活用教育：先端教育への挑戦』海青社

- 沖縄県教育庁義務教育課 (2003) 『小学校英語科年間指導計画』
- 影浦攻 編著 (1999a) 『小学校英語教育の手引き』 明治図書
- 影浦攻 編著 (1999b) 『楽しい英語活動と国際交流活動』 啓林館
- グローバル英語教育研究会編 (1996) 『グローバル英語教育の手法と展開』 三友社
- 佐々木輝夫編著 (1994) 『国際化社会の英語教育』 教育出版
- 佐藤郡衛 (2001a) 『国際理解教育：多文化共生社会の学校づくり』 明石書店
- 佐藤郡衛 (2003b) 『国際化と教育：異文化間教育学の視点から』 放送大学教育振興会
- 佐藤郡衛・林英和編著 (2002) 『国際理解教育の授業づくり』 教育出版
- 多田孝志著 (1999) 『学校における国際理解教育：グローバルマインドを育てる』 東洋館出版社
- 田中博之編 (2002) 『共同交流型カリキュラムを創る』 明治図書
- 豊田充崇 (2005) 『ICT 活用で中学校の授業が変わる』 高陵社
- 中野美知子編著 (2005) 『英語教育グローバルデザイン』 学文社
- 中村耕二 (2007) 『グローバル時代の英語教育：Content-based Process Writing for Oral Presentation』 英宝社.
- 西中隆 編著 『公立学校における国際理解・英語学習』 明治図書
- 前田康裕 (2003) 『コンピュータの創造的活用が英語教育と国際交流を連動させる』 (松川禮子 編著) 『小学校英語活動を創る』 高陵社
- 三浦健治編 (2000) 『小学校国際理解教育の進め方』 教育出版
- 水越敏行監修 (2004) 『ICT教育の実践と展望』 日本文教出版
- 文部科学省 (2001) 『小学校英語活動の手引き』 開隆堂
- 吉田研作 (2003) 『新しい英語教育へのチャレンジ』 くもん出版
- 與儀峰奈子・石川隆士 [共同発表] 2005年 5月28日 LET 外国語教育メディア学会九州・沖縄支部第36回大会発表資料
- Levy, Steven (2007) *The Perfect Thing: How the iPod Shuffles Commerce, Culture, and Coolness.* Simon & Schuster.

資料〔遠隔交流会写真、新聞記事、アンケート調査表〕

遠隔交流会写真



(9)

HAWAII PACIFIC PRESS

June 15, 2005



沖縄との遠隔ビデオ交流会に参加したプナホウ校4年生ら



ハワイの楽器を手に「これは何？」と質問するプナホウ校生

国際交流も新しい時代へ ハワイと沖縄の小学生がIT交流

「IT情報技術が格段と進んで、瞬時に沖縄から遠く東の国際的人材育成」を旨として、プナホウ校4年生と沖縄県の琉球大学附属小学校4年生らが、5月30日、遠隔ビデオ通信による初の国際交流会を開いた。

プナホウ校の午後1時～4時の1時間、ハワイ側の会場はプナホウ校カンパニーホール。4年生の先生陣は、事前に他校の先生陣の第2パソコン教室、仲手先生が生徒40人が取った。担任のクリス・シムワン、校長の「新しい様子」で、先生も先生も、生

「IT情報技術が格段と進んで、瞬時に沖縄から遠く東の国際的人材育成」を旨として、プナホウ校4年生と沖縄県の琉球大学附属小学校4年生らが、5月30日、遠隔ビデオ通信による初の国際交流会を開いた。

プナホウ校の午後1時～4時の1時間、ハワイ側の会場はプナホウ校カンパニーホール。4年生の先生陣は、事前に他校の先生陣の第2パソコン教室、仲手先生が生徒40人が取った。担任のクリス・シムワン、校長の「新しい様子」で、先生も先生も、生

鮮明な画像、良質の音声 遠隔ビデオ通信 語学教育の助っ人に

国際交流は和やかな進められ、有意義な内容だった。インターネットを通じた遠隔ビデオ通信は、語学教育の助っ人に。先生陣は遠隔ビデオ通信のメリットを、生徒達に伝えていく。先生陣は遠隔ビデオ通信のメリットを、生徒達に伝えていく。



司会を務めた与儀峰奈子大助教授

Butterfish Misozuke
MADE AND BOTTLED BY
HAWAIIAN MISO & SOY CO., LTD.
Special Packs for Travel
Call 841-7354 for info.

ケネス岡本弁護士

■自動車事故
■傷害補償
■会社/ビジネス訴訟
■不当医療
■製品責任補償
(日本語も話します)

※豊富な刑事/民事訴訟経験
※ハワイ州法廷調停プログラム主任調停官
※「American Board of Trial Advocates」会員
(ハワイ州で30人の弁護士のみ選出されている)
※日米ボランティア協会会長

PRICE
OKAMOTO Ocean View Center
HIMEMO 707 Richards Street
& LUM Suite 728
Honolulu, Hawaii 96813
Attorney at Law Telephone: (808) 538-1113
A Law Corporation Fax: (808) 533-0549

OTSUKA & BUFFINGTON
A LIMITED LIABILITY LAW COMPANY

新事務所設立を御案内します
大塚・バフィントン
有限責任法律会社

経験豊富な大塚純介弁護士にお任せください。
立教大、カンザス大学法学、大学院博士号、米国最高裁にも弁護士登録。
判例集にも名を連ねています。

民事訴訟、国際私法(日本法)、商法、行政法、不動産法、相続法、移民法、家庭法、税法

1600 Kapiolani Blvd., Suite 1220
Honolulu, Hawaii 96814 (建屋にて事務所)
Tel: (808) 384-9158 Fax: (808) 356-0825
http://www.beikokuhou.com
firm@beikokuhou.com

マーシャル・鈴木
総合法律グループ

日英両語だけでなく文化の差にも精通している弁護士・アシスタントが皆様の法律業務をお手伝いいたします。

●ビジネス関連：会社法
契約一般・業務関連
移民法・アメリカ支店
法人の立ち上げ
●訴訟関係：民事・商事訴訟
企業訴訟支援、刑事事件
少年事件
●家族関係：離婚・相続
●移民法：各種ビザ申請、永住権・市民権申請
対移民局弁護・行政裁判

サンフランシスコ・オフィス
150 Spear Street, Suite 725
San Francisco, CA 94105
電話：(415) 618-0090
FAX：(415) 618-0190

サンノゼ・オフィス
95 South Market Street, Suite 200
San Jose, CA 95113
電話：(408) 998-MSLG (6154)
FAX：(408) 998-6753

代表電子メール：info@marshalluzuki.com
ウェブページ：www.marshalluzuki.com

4 THE HAWAII' I HERALD Friday, June 17, 2005

COMMUNITY FOCUS



Punahou fourth-graders talk to their counterparts in Okinawa via the technology of teleconference. (Photos courtesy of Minako Yogi)



Punahou students watch and listen intently to the Ryudai Fuzoku students at PEACESAT on the UH-Manoa campus.

PUNAHOU AND OKINAWA STUDENTS MEET VIA TELECONFERENCE

With bursts of laughter and lots of energy, 25 fourth graders from Punahou School "met" 40 of their counterparts from Fuzoku Elementary School in Okinawa via the technology of teleconferencing. It was a unique opportunity for both groups of students to communicate with one another using the languages they had learned in class and to deepen their understanding of the two cultures and broaden their perspectives.

The teleconference was held May 25 in the Social Sciences Research Institute conference room at the University of Hawai'i at Mānoa from 3 to 4 p.m. The session was timed to coincide with a 10 a.m. class in Okinawa. In both locations, students were able to see and hear each other on a wide-screen television and communicate simultaneously. The teleconference was coordinated and moderated by University of the Ryukyus education professor Minako Yogi, who is studying at the East-West Center for a year as an Obuchi Research Fellow.

Prof. Yogi worked with Punahou teacher Kris Schwengel, and Ryudai Fuzoku teachers Chika Nakachi and Tomofumi Yamashita to organize and facilitate the interaction between the students. Kekoa Hayashi of UHM's PEACESAT program and Ryuji Ishikawa of the University of the Ryukyus stood by to provide technical assistance.

Yogi opened the teleconference with a brief description of the similarities between Hawai'i and Okinawa in terms of their respective socio-political histories, economies and cultural characteristics.

But the real stars of the hour were the students. They got the exchange off-and-running by posing questions to each other. "What time does your school start?" asked Punahou's Kenny Yamashita. "8:20 a.m. to 4:30 p.m.," replied the Ryudai students. The answer surprised the Punahou youngsters. The Ryudai Fuzoku students were just as surprised to learn that the school day for the Punahou students begins at 8 a.m. and ends at 2:35 p.m. — and that the school year in Okinawa begins in April. The Okinawa students were equally amused to learn that the Hawai'i students begin classes in August. Naturally, they queried each other about their favorite foods.

The students also brought and shared cultural artifacts. "Nani ni ikaun desu ka? (What do you use this for?)" posed Anthony, putting a conch shell up to the screen. "Listen?" the Okinawan students guessed, pointing to their ears, until Anthony blew it, evoking bursts of laughter. "What is this?" asked the Ryudai Fuzoku fourth-graders, pointing to their school backpacks. "School bags!" the Punahou students shouted, followed by an unidentified question, "Are those Prada?" Soroban (abacus) was an easy answer, but the Punahou students were stumped when shown the Okinawan shiisa, or guardian lions. Hula and songs were shared, and the Okinawan students demonstrated calligraphy, prompting one Punahou youngster to remark, "Cool! I want to go to Japan!"

The students also played games. "Simon Says" sent the students into contortions and boisterous laughter. They also lined up in teams of three in front of the television screens (cameras) and played "Jan Ken Po" with each other. For these fourth graders, the distance between Hawai'i and Okinawa faded as they played and interacted with each other.

The hour sped by, and teleconference excited the imaginations of the students in Okinawa as well as here in Hawai'i. It surely met the expectations of the organizers who, in Prof. Yogi's words, "hoped it would stimulate the students' motivation to learn foreign languages and cultures and eventually produce individuals who could play an active role in this global society."

NO WINNER FOR SUMO CONTEST

There were no winners in the 259th sumo contest sponsored by *The Hawai'i Herald* and *Hawai'i Hochi*. Asashoryu won the Natsu Basho with a perfect 15-0 record. Chiyotaikei won 10 bouts and lost 5. Tamanoshima won 5 and lost 10 and Ama came in with a record of 8-7.

Readers will have another chance to win \$100 with the Nagoya Basho, which begins on July 10. The sumo contest entry form can be found in the July 1 issue.

BUDDHIST STUDY CENTER SUMMER SESSION 2005

"Learning the Dharma Through the Life and Thought of Great Buddhists" is the theme of this year's summer session sponsored by the Buddhist Study Center. Rev. Marvin Harada from the Orange County Buddhist Church will conduct the sessions.

The first session is set for July 25-29 and the second from Aug. 1 to 5, from 6:30-9:30 p.m. A satellite session at Lanai Hongwanji will take place on July 31 at 9:30 a.m.

The registration fee — due July 11 — is \$50 and covers handouts, a dinner on the final day and other incidental expenses. The cost is \$5 per day for those wishing to attend on selective days only — and does not include handouts, dinner or incidentals.

For more information, call the Buddhist Study Center at 973-6855.

KAHO'OLAWE: ALOHA 'AINA VS. NATIONAL SECURITY

After more than 50 years of being used as a bombing target by the U.S. military, the island of Kaho'olawe finally began the process of being returned to the state of Hawai'i in 1994 when the U.S. Navy signed a memorandum of understanding on the island's cleanup, restoration, access and transfer of control.

On Wednesday, July 6, Sol Kaho'olahala, director of the Kaho'olawe Island Reserve Commission, which represents the state in all matters pertaining to the island, will share insights on Kaho'olawe's history and to Hawaiians as a place of aloha 'aina (love for the land).

牛角ファンの万  お待たせしました!

Gyu-Kaku "WAIKIKI"

LUNCH OPEN!

Limited 100 meals per day

牛角丼

(BEEF BOWL)

CONDO FOR RENT

Hawaiian Monarch studio w/ocean view

ハワイに日本の文化紹介



遠隔システムでハワイの小
学生と交流する琉大附属小
児童ら（西原町・琉大
側）

の児童約四十人が参加。
ハワイ側も四年生で、お
互いの習慣や文化につい
て話した。

ハワイ側は事前に学習
した首里城や守礼門など
に触れつつ、ハワイと沖
縄はかつて独立国で、独
自の文化を持つなど共通
点が多い」と指摘した。

琉大側はラッドセルや
給食エプロンを示して
「これは何でしょう」と
問い掛け、クイズ形式
で、日本の学校生活につ
いて紹介した。

琉球大学附属小学校と
全国ハワイ州アナホリ小
学校の遠隔交流会が二十
日、西原町の琉大附属
小で行われた。
琉大がハワイと連携
する通信システムを利
用し、小淵国際交流基金フ

ェローシツの助成を受
けて実施した。
児童らに異文化交流を
体験させることで、將
来、グローバルな舞台で
活躍できる素地を育てよ
うと企画された。

琉大附属小は四年一組
話していた。

Hawaii Pacific Press 2005年 2月15日

(7)

HAWAII PACIFIC PRESS

February 15, 2005



琉球大学代表の映った大型テレビを見ながら意見を述べるUHとEWCの代表

EWC、UH、琉球大学
初のテレコンファレンス
未来の人的資源開発話し合う

インターネット・テレ
ン
（EWC、ハワイ学
月27日（木）、EWCの
フレックス・ルームでエ
オ・テクノロジー・レンス
ローバート・ナシエン
の確立を確保した。開会
（EWCの側にも未来の

人的資源開発に關したも
で、インターネットを通じ
のワー・仲通しを確保
初めにあった。

情報通信技術（ICT）の中
開閉に、空洋の中央に
あるハワイと他地域の連
が可能になった。（EWC
日のピクニック・コン
はハワイ時間午後5時30
時半まで続けられ、アジ
太平洋地域の友好促進に
て結び合った。

間はサイ・コン・レ
はハワイ・コン・レ
開閉に、開会の挨拶がE
C、UH、琉球大学の代表
より行われ、本題「Oit
Challenges: Toward Cross
rad Innovation」。我々の
チャレンジ、本誌第1回
けて」が開始され、小淵リ
サイ・プロジェクトに關し
それぞれ代表のスピーチが
われ、そのあと質疑応答
なつた。

EWCは沖縄との関係が特
に廣く、1976年に琉
EWCが設立された。小淵
からは元沖縄県知事大田喜
氏、琉球銀行元取締役中山吉

EWC、UH、琉球大学 初のテレコンファレンス

未来の人的資源開発話し合う



近況を報告する小淵奨学金留學生の5人

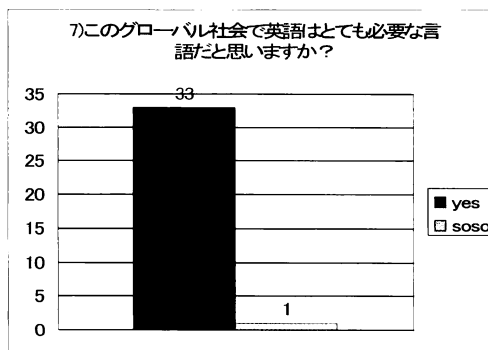
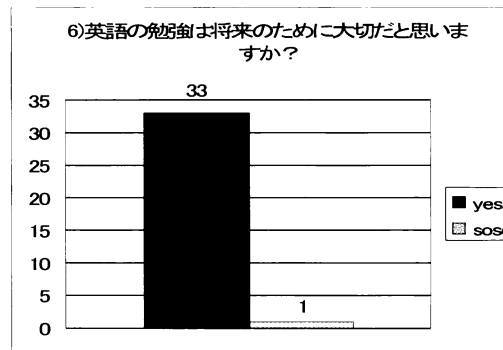
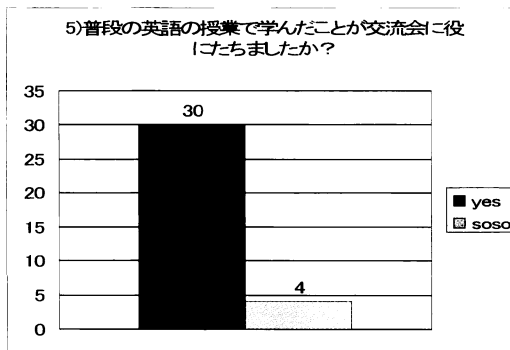
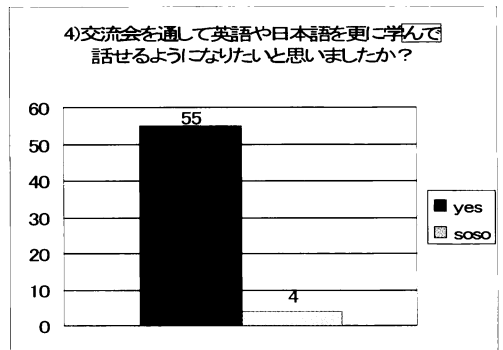
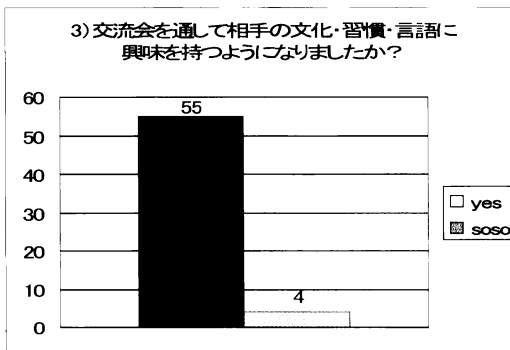
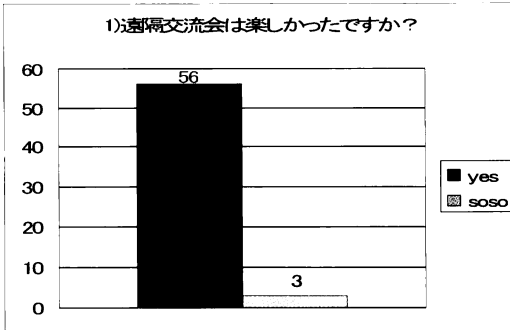
歌手の加藤エミイさん
ホノルル各地で演奏

歌手の加藤エミイさん（EWC）が、
月7日（金）午後1時から、
時、ホノルルのロータリー
7時〜9時、4時からは、
時は、ロイヤルハワイアン、
シヤン・シヤン・シヤン・
ン・ホノルル・ホノルル・
金を開催。次の日（土）
は、今年から午後1時から、
ホノルル・ホノルル・
で、同日、時を替は、ペ
ル・シヤン・シヤン・
タマ・タマ・タマ・
何れも観客が、
拍手が沸いた。ハワイのキ
ター・ホノルル・ホノルル・
廣く加藤さん（EWC）と共
たが、04年をもち
イのメーン・プログラム
04年・シヤン・シヤン・
サム・シヤン・シヤン・
選出に、ハワイのテレビ
選出に、エミイさんの共演



氏、琉球大学元総長浦田昭
氏、そのほか多くの政府、
ビジネス、教育関係者が、
更に多くの奨学生、
沖縄県振興の柱となり、今
の研究が可能なた

アンケート調査結果〔表1-7〕



小学生アンケート回答用紙〔例〕

Evaluation and comments of the teleconference (May 25th, 2005)

Name: Dayna Yogi

- 1) Did you enjoy participating in the teleconference?
Yes, more than my expectation!
- 2) What did you learn through the teleconference?
I learned a little bit of Japanese, and I also learned some new Japanese ways.
- 3) Did you become interested in Japanese/Okinawan Cultures?
Of course! I'm Okinawan and Japanese, besides I was always interested.
- 4) What activity did you enjoy the most during the teleconference?
I loved seeing how the animals in Japan acted. I would have never thought that a dog would whine like that.
- 5) What did you learn about the Okinawan students?
I learned that they have as many opportunities as us, but they try to make the most of it.
- 6) Would you like to participate in another teleconference in the future?
Who wouldn't! Oh, and next time I want to stay even longer!!!!
- 7) What kind of activities would you like to try through the screen in the future?
I would like to maybe reach through a screen and maybe we could all have our own little microphone thing and we could talk to each of them individually on a mini screen, and they could have one, too!
- 8) Please give additional comments on the teleconference.
It was awesome, and I want to do it over and over again! Thank you for giving this opportunity to us.

Evaluation and comments of the teleconference (May 25th, 2005)

Name: Oksana Ruiz

- 1) Did you enjoy participating in the teleconference?
Yes, I loved participating in it.
- 2) What did you learn through the teleconference?
I learned that just because we live in different places and time zones doesn't mean we are that different.
- 3) Did you become interested in Japanese/Okinawan Cultures?
Yes, I had always been interested in different cultures.
- 4) What activity did you enjoy the most during the teleconference?
I most enjoyed the Simon Says games.
- 5) What did you learn about the Okinawan students?
I learned that they work very hard, but it's easy.
- 6) Would you like to participate in another teleconference in the future?
Yes, I would enjoy participating in the future.
- 7) What kind of activities would you like to try through the screen in the future?
Maybe have each student do something about themselves.
- 8) Please give additional comments on the teleconference.
I expected the students to be totally different from us but we are very much alike. I hope to have another teleconference some time soon.

Thank you very much for your cooperation and wonderful performances in the teleconference!

Evaluation and comments of the teleconference (May 25th, 2005)

Name: Keala

- 1) Did you enjoy participating in the teleconference? yes
- 2) What did you learn through the teleconference? yes,
I learned that Japanese think animal sound different.
- 3) Did you become interested in Japanese/Okinawan Cultures? yes,
I did
- 4) What activity did you enjoy the most during the teleconference?
I enjoyed the guessing game
- 5) What did you learn about the Okinawan students? They stay
at school longer than us.
- 6) Would you like to participate in another teleconference in the future? yes
- 7) What kind of activities would you like to try through the screen in the future? maybe hide-and-go-seek.
- 8) Please give additional comments on the teleconference.
I liked doing it and hope to do it again.

遠隔交流会アンケート

- 1) ハワイの小学校との遠隔交流会は楽しかったですか?
とても楽しかったです。
- 2) どのようなことが楽しかったですか?
クイズとフラダンスをおしえて
もらったのが楽しかったです。
- 3) 交流会を通して学んだことは何ですか?
英語をももう少し話しかた。
- 4) 交流会で一番印象に残ったことは何ですか?
フラダンスです。
- 5) 交流会を通してハワイの小学生と直接会ってお話しがたくなりましたか?
はい。でも少ししんはいです。
- 6) 交流会を通してハワイの文化・習慣・言語に興味を持つようになりましたか?
少しだけ。
- 7) 交流会を通して英語をもっと学んで話せるようになりたいと思いましたか?
はい。
- 8) 普段の英語の授業で習ったことが役に立ちましたか?
少しだけ。
- 9) 英語の勉強は将来のために大切だと思いますか?
はい。
- 10) このグローバルな社会で英語はとても必要な言語だと思いますか?
はい。
- 11) 将来はどのような人になりたいですか?
英語も日本語もしゃべれる人
- 12) 遠隔交流会に使った機器(スクリーンや会議カメラシステム)についてどう思いましたか?
見たことなかつたのですごくいい思いました。
- 13) 今後、遠隔交流会を通してどのようなことをやってみたいですか?
英語を教えてもらってハワイの子には日本語を
教えてあげて協力ありがとうございました
たいです

遠隔交流会アンケート

- 1) ハワイの小学校との遠隔交流会は楽しかったですか?
とても楽しかった
- 2) どのようなことが楽しかったですか?
クイズをとくのが楽しかった。
- 3) 交流会を通して学んだことは何ですか?
英語をもっと話したかった
- 4) 交流会で一番印象に残ったことは何ですか?
はじめの「ニュースみたいテレビ」
にアれたこと
- 5) 交流会を通してハワイの小学生と直接会ってお話しがたくなりましたか?
はい
- 6) 交流会を通してハワイの文化・習慣・言語に興味を持つようになりましたか?
はい
- 7) 交流会を通して英語をもっと学んで話せるようになりたいと思いましたか?
思いました。
- 8) 普段の英語の授業で習ったことが役に立ちましたか?
はい
- 9) 英語の勉強は将来のために大切だと思いますか?
はい
- 10) このグローバルな社会で英語はとても必要な言語だと思いますか?
はい
- 11) 将来はどのような人になりたいですか?
英語をいっはいしゃべれる人
- 12) 遠隔交流会に使った機器（スクリーンや会議カメラシステム）についてどう思いましたか?
カメラがもいさからた。
- 13) 今後、遠隔交流会を通してどのようなことをやってみたいですか?
英語をもっとまなぶこと

4の1 若し

遠隔交流会アンケート

- 1) ハワイの小学校との遠隔交流会は楽しかったですか?
楽しかった
- 2) どのようなことが楽しかったですか?
いろんなことをいっしょに
とても楽しかった。
- 3) 交流会を通して学んだことは何ですか?
・英語をまなぶ
・フランスもいっしょに学んだ
- 4) 交流会で一番印象に残ったことは何ですか?
・中絶やハワイの物をクイズに
して交流したこと
- 5) 交流会を通してハワイの小学生と直接会ってお話しがたくなりましたか?
はい
- 6) 交流会を通してハワイの文化・習慣・言語に興味を持つようになりましたか?
はい
- 7) 交流会を通して英語をもっと学んで話せるようになりたいと思いましたか?
はい
- 8) 普段の英語の授業で習ったことが役に立ちましたか?
はい
- 9) 英語の勉強は将来のために大切だと思いますか?
・大人になって使うかもしれ
ないので大切だと思います
- 10) このグローバルな社会で英語はとても必要な言語だと思いますか?
はい
- 11) 将来はどのような人になりたいですか?
海外にいてほしい
- 12) 遠隔交流会に使った機器（スクリーンや会議カメラシステム）について、どう思いましたか?
・いろんなきかいを通じて、すごいなあ
と思った
- 13) 今後、遠隔交流会を通してどのようなことをやってみたいですか?
ハワイの有名な物や生活にた
いてきたい